

## デフォー、スウィフト、そしてハーリー

塩谷清人

ダニエル・デフォー（一六六〇—一七三一）とジョン・スウィフト（一六六七—一七四五）はほぼ同時代人である。その活動期もかさなる。またその時代の思潮をリードした二人だったが、二人が直接会ったという記録はない。当時のせまい文壇世界でこれは不思議な話である。

しかしデフォーの出自や活動領域を考えると二人の接触がないのも納得がいく。非国教徒（ディセンター）で大学を出ていない（当時非国教徒は入学できなかった）デフォー、さまざまな商売をやったデフォー、政府、とくにロバート・ハーリー（Robert Harley）のちのオクスフォード伯）との関係で隠密行動をしたデフォーが、聖職者で文人のスウィフトと接触点がほとんどないのは当然かもしれない。当時デフォーの名は『生粋のイギリス人』（*The True-Born Englishman*, 一七〇二）や『レビュー』（*The Review*, 一七〇四—一七二三）などで広く知られていたが、文人のあいだでは「節操のない

物書き」、「売文の徒」であつて、スウィフトの言い方では「無学な物書き<sup>(1)</sup>」でしかなかった。一八世紀の文学者評価を知るうえで基準になるS・ジョンソンの『英国詩人伝』にデフォーが扱われないのは当時としては自然であつた。

ところが、この二人が急接近した時期が一七一一年にあつた。首相になつたハーリーの指示のもとで、共通の目的のために二人が論陣を張ることがあつた。スペイン継承戦争の早期終結を求めるプロパガンダ論文である。それがデフォーの『金のかかるこの戦争を早急にやめるべき諸理由』（*Reasons Why This Nation Ought to Put a Speedy End to This Expensive War*）と、スウィフトの『同盟諸国の行状』（*The Conduct of the Allies*）である。

当初、二人とも、ハーリーに依頼されて同じ趣旨の論文を書いていることを知らなかった。二人は同時期ハーリー宅に入入りしたが、

顔をあわすことがなかった。おもしろいエピソードとして、そのときスウィフトはハーリー宅の玄関から入り、デフォーは裏口から入ったといわれている。スウィフトはハーリー宅にしばしば招待され、晩餐を共にしているが、デフォーはそのような扱いを受けなかった。デフォーはそのような存在だった。

論文の重要度、影響度では『同盟諸国の行状』がはるかに高いが、同一テーマで二人が書いた論文を比較することで、この時期における両者の状況の確認、ジャーナリストとしての特質、差異、さらには文学的資質の差などを示すことが小論の目的である。

まず時代背景を簡単に書いておくと、対外的には、イギリスは一七世紀後半の半世紀間、三次にわたる英蘭戦争やファルツ戦争（アウクスブルク同盟戦争）を戦ったが、一八世紀早々にその最後ともいべきスペイン継承戦争（二七〇一―一七一三）<sup>(2)</sup>に入っていた。国内では、一七〇一年から一七一五年はトリーとホイッグがもつとも激しく争った時期である。ただ、トリーとホイッグの色分けは簡単ではない。<sup>(3)</sup>その政争と呼応して、当時はペーパー戦争といわれたほど、政党の活動にジャーナリズムが利用された時期であった。<sup>(4)</sup>文学者もそのような政争と無関係ではいられない時代であった。

問題の一七一〇年前後はこの長期政争をどう終結するかで議論が激しかった。党派的には、戦争継続に賛成したのがホイッグ党、できるだけ早い停戦を求めたのがトリー党である。<sup>(5)</sup>だんだん高まる

厭戦気分と、サシェヴェラル事件<sup>(6)</sup>を契機に英国国教会、とくにハイチャーチが勢力を得て、一七一〇年の総選挙でトリー党が大勝、そこで一七一四年までの四年間、トリーでも穏健なハーリーが政権を握っていた。

ハーリーはヘレフォードシャーの地方地主の息子であるが、もととプレスビテリアン派（非国教徒）の家系であった。オールドホイッグといわれ、君主が支配し議会在が監視する立憲君主制を支持していた。（同じホイッグでも宮廷寄りで資産造りを目指すモダンホイッグの考えに批判的だった。）長いあいだ三頭政治<sup>(7)</sup>でやってきた仲間の二人、ゴドルフィンとモールバラの戦争継続を批判し、一七一〇年ハーリーはアン女王の意向も受けてトリー党勢力と組んで組閣する。ハーリーの自己弁護では「自分が転向したのではなく、ホイッグ党が変節したのだ」<sup>(8)</sup>。それがハーリー内閣の誕生だった。いずれにしても、彼は本来、党派にとらわれない思考の政治家だった。

### デフォーとハーリー、転向

デフォーは『非国教徒撲滅捷徑』*(The Shortest-Way with the Dissenters, 1702)*での筆禍で入獄、晒し台の刑を受け、さらに破産した。そのとき救いの手を差し伸べたのがロバート・ハーリー<sup>(9)</sup>だった。ハーリーはもともと世論操作を大変重視する政治家だった

から、すでにジャーナリストとして評価され、筆力のあるデフォーに接近した。「政府側に思慮深い著述家を雇うことは大変便利だ」デフォーは以後ハーリーのために働くことになる。彼が『レヴュー』を一七〇四年に書き始めたのもハーリーの意向を汲んでのことであった。<sup>(11)</sup> 彼がイングランド各地の選挙情報を集め、一七〇七年のイングランド・スコットランド合同に向けて諜報活動をしたのも、やはりハーリーの意向である。この間のことは、デフォーの『書簡集』に収録されている多数のハーリーとの手紙のやり取りで明白である。例えば、ハーリーは次のように指示している。

一、君はイングランドの誰かに雇われていると思われぬように、また自分の仕事で、この国「スコットランド」が好きで、ここに来たのだと思われるように最大限、気をつけなさい。<sup>(12)</sup>

ハーリーとの関係が切れないのは、デフォーが筆禍や債務で監獄に入るたびにハーリーに助けてもらい、また一定の手当てを活動費としてたえず与えられていたからである。<sup>(13)</sup> しかし、デフォーとハーリーの関係は単に金銭面だけで生じたわけではない。さきに書いたように、ハーリーはもともと非国教徒の家系で、デフォーと同じくホイッグ支持であった。そこでデフォーにとってハーリーの意向に沿うことにあまり抵抗感がなかった。ハーリーは次第にトリーに傾斜していったが、彼の穏健な政策はデフォーにも受け入れられる

ものであった。これがデフォーの「転向」であるが、ハーリーを軸にしてデフォーの行動を見る限りあまりブレはない。一般に言われている転向とは事情が異なる。逆にデフォーの行動に一貫性をみとめることができる。デフォーの転向が一般に白い目で見られるのは、金銭が関係しているからである。スウィフトは生活のために「転向」することはなかった。

デフォーとハーリーの関係は、一七〇二年から一三年まで続いている。<sup>(14)</sup> 二人の関係は、あくまでハーリーが考え方を指示しデフォーがそれに従うというものであった。それゆえ、柔軟なハーリーの思考にあわせていくうちに、固い信条の非国教徒であるデフォーが宗教的な措置で自説を曲げざるを得ないことがでてくる。とくにハーリーがまだ首相時代の一七一四年に通った「分離派法」の議会通過でデフォーはショックを受けた。<sup>(15)</sup> この件でハーリーに裏切られたという思いと、彼の首相退陣、政界引退もあつて、両者は最終的に決別することになる。

### スウィフトとハーリー、転向

スウィフトは、ウィリアム・テムプル卿の死後（一六九九年）アイルランドへ行く。その後何度かイギリスに来たが、彼にとつて重要な長期滞在はこの一七一〇年から一七一四年のあいだである。当初、アイルランド教会のキング大主教の命を受けて、英国国教会同

様にアイルランド教会への初穂税返還を得るための運動の一環としてイギリス政界に接近した。スウィフトがイングランドを訪れる目的はもうひとつあった。彼はイングランド内で主教か、首席司祭、あるいは別の栄位をかねがね求めていた。それを政府の要人に要求していた。当時スウィフトは「ねだり名人」(Master of Requests)と陰口をいわれている。<sup>(17)</sup>一七二〇年、ハーリーは政権につくとすぐに、この初穂税返還をスウィフトに約束した。その前の一七〇七年に滞在したとき、この問題でホイッグ党の政治家に接近して冷たくあしらわれていただけに、スウィフトは大変喜んだ。

こんなに早く事がまとまるなどということはいままでないと思う、これもひとえにハーリー氏と自分の信頼によつてできた。氏は大層親切にしてくれるので、もつと立派な扱いをしてもいい人間をあんなにひどく扱った反対党「ホイッグ党」の悪党ぶりを見せつけるしか、しようがない。<sup>(18)</sup>

スウィフトの政治的手腕が証明されたわけでもある。実際、この功績で三年後(一七二三年)に、彼自身は不満であったが、ダブリンのセント・パトリック寺院の首席司祭の地位を得た。とにかく、一七二〇年以後スウィフトのハーリー支持、トリー支持は明確になる。ジャーナリストの才覚を見抜くことが上手なハーリーはスウィフトを自分の論陣に加わらせたかったのだろう。ハーリーはす

に刊行されていたトリー系の週刊誌『イグザミナー』(the Examiner)の執筆をさつそくスウィフトに依頼している。「かれらの大変な難問はいい書き手に不足していることだった」とスウィフトは自慢する。<sup>(19)</sup>彼はトリー政権側から前ホイッグ系政権を批判する記事を書くことになった。

これがスウィフトの場合の転向である。スウィフトはもともと党派的行動を嫌悪し、個人の動きを重んじるほうだったから、何党に属するという意識はなかった。スウィフト自身はもともと「政治的にはホイッグ、宗教的にはトリー」と言っていたが、宗教人として重点は後者にあつた。ただ、イングランドの側からは、彼はアイルランド系プロテスタントとして政治的にホイッグと見られていた。<sup>(20)</sup>ホイッグ党に親しい政治家が多かった。ハーリー支援をしたからといって、彼自身は転向したつもりはなかった。『イグザミナー』執筆第一号の冒頭で「わたしはふだんから両党の立派なひとたちと同等に自由に付き合うことにしている」と言明している。<sup>(21)</sup>スウィフトの自己弁護は「一七二〇年の内閣政変に関する覚書き」

(Memoirs, relating to That Change which happened in the Queen's Ministry in the Year 1720) に書かれている。

いずれにしても、スウィフトの「転向」もデフォアのそれと同じく、ハーリーが契機となっている。ただスウィフトの名誉のために書けば、スウィフトとハーリーの関係はデフォアの場合と違って、決してハーリーが主導権を握って、スウィフトが従うという構図で

はない。また金銭関係も存在しない。もちろん初穂税返還の恩義はあつて、ハーリーのためにという気持ちは働いているが、突き詰めれば、この時点でのスウィフトの考えがハーリーのそれと合致したのだ。ハーリーの柔軟な政治姿勢と呼応するところがあつたのだから。ただ、この「転向」によつてスウィフトは、親しかつたホイッグ党の大立者、サマーズ卿やハリファックス卿たちと離反し、かれらから転向者と見られるようになる。

一七〇四年の『桶物語』(A Tale of a Tub)<sup>(22)</sup>などで、文筆家としてすでに名を成していたスウィフトだったが、ジャーナリストとして頭角をあらわすのは、一七一〇年からの『イグザミナー』と『同盟諸国の行状』以降である。このときの滞在記録が『ステラへの日記』(Journal to Stella)で、ステラ(エスター・ジョンソン)との関係だけでなく、ロンドン滞在中のスウィフトの活動を知るうえで、貴重な資料である。

### 「和平」への二人の論文

ハーリーはプロバガンダを重視するひとだったから、和平協議がスムーズにいくようにデフォーとスウィフトの二人を広報担当として使った。

二人の論文を比較するまえに再度思い出しておきたいことは、ハーリーと両者の関係である。デフォーはハーリーに指示される側で

あるのに対して、スウィフトはハーリーの意向を受けながらも、それに縛られることなく独自色が出せる立場にあつた。デフォーはいちいち書く内容をハーリーに確認して書いているが、スウィフトはこの重要論文『同盟諸国の行状』を書く際、ハーリーなどに事実関係でチェックしてもらい、細部で修正しているが、基本的にはスウィフト流の書き方をくずしていない。

デフォーは一七一一年一〇月六日に『金のかかるこの戦争を早急にやめるべき諸理由』を書いた。厭戦気分が高まつたため、その前の総選挙でトリーが大勝して、急遽、政府は対仏交渉を開始した。その交渉の詳細がこの頃一般に知られるようになる。そこで政府支援のパンフレット第一号として書かれたのがこの作品である。もともとホイッグ系で戦争支持派だったデフォーが和平交渉を支援するようになったのは、ひとえにハーリーとの関係による。

「要約」長期にわたる戦争で国全体があえいでいる、戦費もかきむが戦死者も多数出ている。イギリスが考えているほど、フランス軍は弱くなっていない。フランスが先に降参してくると思うのは間違いだ。ウールの輸出など貿易に支障が出ている。戦争を継続するには、物品税など税金をあげるしかない。そもそもこの戦争の目的はなんだつたのか。フランスが強大になるのを防ぐことだった。すでにその目的は達成している。他の同盟軍の同意なく単独講和を結ぼうとしているという非難があるが、いつもオランダが交渉の場に

一緒である。交渉のやり方そのものを非難するのは、党派にとらわれた言い方である。ホイッグ党のいうように「スペインなくして和平なし」(No Peace without Spain) という状況ではない。ルイ一四世の孫フィリップ(フェリペ)がスペインの王になることと、オーストリア帝国のシャルルがスペインをも支配するのとどちらがいいか。後者になると、ヨーロッパのバランス「オヴ・パワー」が狂ってくる。われわれはアメリカの一部、南米のスペイン領を分割してもらえば、フィリップがスペイン王でもいいではないか。

一方、スウィフトの『同盟諸国の行状』はデフォアの作品から一カ月半以上遅れた一月二七日に出された。しかしデフォアの作品を見て書いたということはない。すでに『ステラへの日記』<sup>(23)</sup>で九月にこれに取り掛かっていると書いているから執筆時期はデフォアのそれとほぼ同時期になる。これを執筆中、スウィフトはほかにほとんど何も書いていない。およそ四〇日ひたすらこの作品に打ち込んでいる。彼がかなりの精力をこの作品に注いだことが分かる。一方、デフォアは上記作品を書いた期間中『レヴュー』ほか、二〇以上の小冊子を書いた。

「要約」まず「序」で、戦争遂行支持の不当性、理不尽を説く。国民の圧倒的多数は戦争継続に反対し、国は疲弊しているのに、ごく一部が私利私欲や一党派の利益のために戦争をやっている。一〇年戦争をやつて、しかもたえず勝っていないながら和平できないとは信

じられない。このような事実を国民に知らせる義務がある、

本文では、戦争はどのようなときに始め、またいつ終戦とするか。これまでの例をあげる。今回は自国が侵略されたわけではなく、同盟国のために戦っている。もともと数人の私利私欲のためにはじめられた戦争である。(その戦費はこれまで六千万ポンドかかっている。国の税収は年二五〇万ポンドしかない。戦死者も一〇万人になる。そのため国債を発行して借金をしている。それで潤うのは成り上がりの金融業者(Monied Men)だけである。同盟国援助であるのに、主戦国でないイギリスがなぜ深入りしているのか。自国の利益にならない戦争を大陸で行っている。イギリスは海軍国だから、海軍を使って西インド諸島でスペインを破つたほうが自国のためになる。モルバラ將軍と彼の一族(the Family)の富と名声のために戦っている。同盟諸国はその協定違反をして割り当てられた兵力や軍費を負担していない。とくにオランダがひどい。「スペインなくして和平なし」の主張では戦争は終結しない。もし仮にスペインがオーストリアと同じ皇帝のもとに支配されたら強大になってしまうではないか。

## 二 論文からみる二人の特色、差異

両論文は、基本的な内容は同じである。長期間の戦争によるイギリスの疲弊、本来の戦争目的からの逸脱、などが指摘される。しか



し、デフォー論文が原則論を展開しているのに対して、その二倍以上長いスウィフト論文は、かなり具体的にその状況を説明している。それは、ハーリーなどからの内部情報によつて、軍事費など具体的な数字を得ているためで、一層説得的になっている。デフォーにはそこまでの情報はなく、さらにハーリーの意向に沿つて和平に反対するホイッグ系の人々を説得することに重点を置いていたため、論述に煮え切らなさが残る。ホイッグの反対論に答える形であるから、独自色は出ていない。デフォーにとつて一番障害になったことは、ハーリーの和平政策が彼自身心底から支持できるものでなかったということだろう。それが煮え切らなざになり、反対論への単なる応答に終つている。デフォー論文はスウィフト論文に先駆け、先行作品として意義はあるがあまり大きな影響力を持たなかつた。

『同盟諸国の行状』は題名にあるとおり、痛烈な同盟国批判である。スウィフトはもともとオランダがプロテスタントであるという宗教的な理由や、共和主義的な側面からオランダ嫌いであつた。それゆえ、彼の鋭利な論鋒は猛烈なオランダ攻撃となつて出ている。それが当時の人々の愛国主義傾向とうまく合致した。一方、デフォーは本来オランダびいきであり、貿易など、彼の得意の経済活動では学ぶ点が多いと考えているから、そのような同盟国批判はしない。スウィフトは、同盟諸国内の一般に公開されていない内部資料の協定文(第八条)をもとに論じて、イギリスが他の同盟国以上に分担金を負つて、後世にまでおよぶ莫大な借金を抱えていることを示

した。スウィフトは「自分はひとの知らない情報を持つている」と書いている。詳細な事実(といつても事実誤認や条文の誤読を敵方から指摘されもしたが)に基づいて説いた。ハーリーがこのペーパー戦争で一番頼りにしたのはスウィフトだつた。<sup>(25)</sup>

しかし、ここではスウィフトの論客ぶりをみることができる。『同盟諸国の行状』の正式な題名は「同盟諸国と現在の戦争を始め遂行した前内閣の行状」である。そこで、国内に矛先が向かうとスウィフトの攻撃は一層はげしくなる。モールバラ一族攻撃はトリーのお得意とするところだが、「一族」(the Family)という言い方で、私利私欲を強く印象付けている。デフォーはもともとモールバラ將軍を尊敬していたから、その論文では、個人攻撃はしない。スウィフトの個人攻撃は有名だが、それに風刺的な鋭さが加わると一層効果的になる。トレヴェリアンの指摘のように、実際、スペイン継承戦争でのモールバラの働きは目覚しかった。モールバラによつてヨーロッパ大陸でのフランス支配が阻止されたというトレヴェリアンの考えからすれば、スウィフトの書き方は客観的でないことになる。<sup>(26)</sup>

いずれにしても、戦争継続を私利私欲や個人攻撃に集中させ、ホイッグ系の金融業界を槍玉にあげ、同盟国を徹底批判して、国民感情を誘導していくこの『同盟諸国の行状』は、大変な反響を呼んだ。議会開会一週間まえというタイミングのよさもあつて、議会内でもおおきな影響力を持った。わずか二ヶ月で一万一千部売れ、さらに

増刷も用意されるほどであった。状況的に厭戦気分のかかり、サシェヴェラル裁判にみられる右傾化など、ハーリー政権の方針を支持する流れができてはいたが。

このあとの経緯は、スウィフトの論文も大きな力になって、和平案は議会を通過する。スウィフトは自分の『同盟諸国の行状』が議会の議論で必ず引用されるとステラに書いた。といつても、平民院は圧倒的に政府支持だったから問題なく通過したが、貴族院はホイッグが強かったから、ハーリーは政府支持の貴族を二人あらたに増員するという奇策をやつと、こちらは通つた。

スウィフトはこの後しばらく論客として大活躍するが、彼のもう一つの目的である、イングランドでの高位聖職にはつげず、一七一四年八月ダブリンに失意のうちにもどる。彼にとつて、一七一〇年から一七一四年のイギリス滞在期間は、イギリス政界との関係で一番活躍した時期だった。

デフォーにとつても、アン女王治世時代が政治との関わりでは一番活発な、また個人的にも浮き沈みのはげしい時期だった。『レヴュー』が一七一三年に廃刊になったのは、デフォアの人生では象徴的なことだった。その後も政府関係、あるいは覆面ライターとして野党関係の雑誌に執筆を続けたデフォアであるが、すでに活躍期は終りつつあった。

二つの論文が扱ったスペイン継承戦争はその二年後のユトレヒト

条約（一七一三—一七二五）によって決着を見る。これによって一番得をしたのは皮肉にもイギリスである。フランスのルイ一四世のヨーロッパ覇権の夢は消えた。イギリスは世界各地に植民地をあらたに得て、のちの大英帝国の基盤を築く。オランダはこの時期から列強諸国の仲間でなくなった。

#### 注

(1) Swift, Jonathan, *The Examiner and Other Pieces Written in 1710-11*, ed. by Herbert Davis (Oxford, Basil Blackwell, 1953), p. 13.

(2) ウィリアム三世（在位一六八九—一七〇二）は英国王になるまえのオラニエ公ウイレムの時代から祖国オランダを守るため腐心した。そこでイギリスはフランスの勢力拡大を阻止するためにオランダやオーストリア帝国と連合軍を組んで参戦した。この戦争の大義名分はフランスのスペイン支配及び、ルイ一四世の覇権主義の阻止と、オランダなどプロテスタント諸国の防衛、である。当初それに反対する者は少なかった。しかし戦争が長引くにつれて、早期決着を求める声がかまっていた。

(3) 一番明解な両党の区別は、宗教に対する違いである。トーリーは英国教会を排他的に堅持するのに対して、ホイッグは非国教徒に寛容であった。その姿勢は王位継承にもつながる。あくまでプロテスタントの王を継承させるのがホイッグであり、逆に正統な王家の維持にこだわる保守的な姿勢がトーリーである。トーリーは従来の絶対王政の影響を受けて、君主の権力を議会の上位にした。トーリーでも右翼のハイチャーチは王権神授説を奉じた。英国国教会支持のトーリーが、名譽革命でフランスに亡命したジェームズ二世の復辟を秘かに画策したのも、この信念からである。地方の大土地所有



者にトリーが多く、都市部で逆にホイッグが多いのは確かであるが、そうでないケースもしばしばある。ハーリーもそうだし、R・ウォルポールも地方地主出のホイッグである。

(4) 1695年「出版許可法」廃止を受けて、*ちまよ*な定期刊行物が出された。例えば、ホイッグ系の『*The Daily Courant*』トリー系の『*The Post Boy*』<sup>53)</sup>。

(5) 戦費は基本的に地税でまかなわれていたから、土地所有者を支持基盤とするトリー党は長期の戦争継続に反対していた。一方ホイッグ党はつきりした戦果が見えない段階での終戦に反対していた。

(6) ハイチャーチの聖職者H・サンエヴェレルの1709年11月にセント・ポール寺院で非国教徒と寛容法を非難する過激な説教を行い、それをホイッグ党が弾劾し、裁判となった事件。ホイッグ党のもくろみが裏目にて、これがもとで「教会の危機」が叫ばれ、国教会内の強硬派が強くなり、さらにその直後の選挙でトリー党が大勝する。

(7) 当時、内閣指名はアン女王の権限だった。ハーリーは1701年から平民院の議長を勤めたあと、大蔵大臣のゴドルフィン内閣(1702年—1708年)で、国務大臣となる。アン女王はトリー、ホイッグ両党から大臣を指名、いわば拳党内閣をつくったが、ゴドルフィン、モールバラとハーリーは組んで三人で三頭政治といわれた。この長期政権末期に、三人の連携にも亀裂が出て、ハーリーが政権から追われ、ホイッグ色が強い政権になる。ゴドルフィンとモールバラは戦争継続を主張したが、ハーリーは早期の平和を目指した。

(8) Cf. Downie, J. A., *Robert Harley and the Press* (Cambridge, Cambridge U.P. 1979), p. 21.

(9) タウニーの情報ではこの筆禍事件以前にデフォーが借財でフリー

ト監獄に収監されたとき、ハーリーは彼と接触したという。

(10) ゴドルフィン宛の1702・8・9の手紙。Cf. Downie, J. A., *op. cit.*, p. 58.

(11) 『レビュー』の正式な題が『*A Review of the Affairs of France*』(フランスの状況評論)とあるように交戦国であるフランスの実力を伝えて国民の理解を助けることにあつた。それによって逆にデフォーは読者からフランスびいきと見なされもした。『レビュー』は1704年からデフォーが一人で出しつづけた(週二回、途中から三回)定期刊行物だが、それが一七一三年に終るのは、時代とずれて売れなくなったこともあるが、ユトレヒト条約による和平で、この雑誌の役目が終わったことも関係する。

(12) Defoe, D., *The Letters of Daniel Defoe*, ed. by G. H. Healey (Oxford, 1955), p. 132.

(13) 一定額の手当てで足りなくなると、デフォーは遠慮しながらハーリーにとときにはお金の無心をしている。

(14) ただ1708年にハーリーが一時的に辞職して復活する一七二〇年まで両者の関係は途絶える。

(15) 「分離派法」(the Schism Act) は、議会内の妥協の産物としてハーリーが通した法案で、非国教徒が学校運営をしたり教職に就くのを禁じた法案。

(16) 「初穂税」(the First Fruits) は教会から女王へ上納する税であるがすでに英国教会には返還されていた。

(17) Downie, J. A., *op. cit.*, p. 132.

(18) Swift, J., *Journal to Stella* ed. by Harold Williams (Oxford, Basil Blackwell, 1974), vol. 1, p. 66.

(19) Swift, J., 'Memoirs relating to that Change in the Queen's Ministry in 1710' in *Political Tracts, 1713-1719* ed. by Herbert Davis & Irvin

- Ehrenspreis (Oxford, Basil Blackwell, 1973), p. 123.
- (20) Trevelyan, G. M., *England Under Queen Anne, vol.3: The Peace and the Protestant Succession* (London, Longman, 1934), p. 97.
- (21) Swift, J., *The Examiner and Other Pieces Written in 1710-11*, ed. by Herbert Davis (Oxford, Basil Blackwell, 1953), p. 3.
- (22) 『桶物語』は物議をかまじアン女王の逆鱗にやれ、そのためインペーンズへの高位聖職の地位を得られなくなつたと言われつゝ、  
 #中元はもつぱり終るなごうけなごのさめつへり仕上はる」
- (23) Swift, J., *Journal to Stella*, vol.2, p. 373. 「いひはるはる一週間ごうけなごのさめつへり仕上はる」
- (24) Swift, J., *Political Tracts, 1711-1713* ed. by Herbert Davis (Oxford, Basil Blackwell, 1973), p. 53.
- (25) Downie, J. A., *op. cit.*, p. 126.
- (26) Trevelyan, *op. cit.*, p. 192.

生誕参考文献

- Defoe, Daniel, *Political and Economical Writings of Daniel Defoe, vol.2: Party Politics*, ed. J. A. Downie, (London, Pickering & Chatto, 2000).
- Defoe's Reviews*, ed. A. E. Secord (New York, Columbia University Press, 1938).
- The Letters of Daniel Defoe*, ed. by G. H. Healey (Oxford, Oxford University Press, 1955).
- Swift, Jonathan, *Political Tracts, 1711-1713*, ed. by Herbert Davis (Oxford, Basil Blackwell, 1973).
- Political Tracts, 1713-1719* ed. by Herbert Davis and Irvin Ehrenpreis (Oxford, Basil Blackwell, 1973)
- The Examiner and Other Pieces Written in 1710-11*, ed. by Herbert Davis (Oxford, Basil Blackwell, 1953).
- Journal to Stella* ed. by Harold Williams (Oxford, Basil Blackwell, 1974).

- Trevelyan, G. M., *England Under Queen Anne, vol.3: The Peace and the Protestant Succession* (London, Longman, 1934).
- Backscheider, Paula, *Daniel Defoe, His Life* (Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1989).
- Downie, J. A. *Robert Harley and the Press* (Cambridge, Cambridge U. P. 1979).
- Schonhorn, Manuel, *Defoe's Politics* in Cambridge Studies in Eighteenth-Century English Literature and Thought (Cambridge, Cambridge University Press, 1991).

## デフォー、スウィフト、そしてハーリー

塩谷清人

イギリスは名誉革命が終った17世紀末からは、王権が抑制され、近代議会制度が急速に成長していく。いわゆるトーリーとホイッグという二大政党の色分けがはっきりしていくのもこの時代である。両党は政策の広報活動としてジャーナリズムを利用した。「出版物許可法」失効(1695)を機に新聞、雑誌が一気に出版された。当時のその現象を「ペーパー戦争」と呼ぶ。文学者たちもその動きに巻き込まれた。デフォーとスウィフトが政治的に活躍したのはちょうどその時期だった。

この時代を代表するこの二人の作家は直接には面識がない。まだ宗教と政治との関係が色濃い時代で、トーリーと英国国教会、ホイッグと非国教徒の結びつきは強かった。デフォーは非国教徒で当然ホイッグと見られていた。一方スウィフトは英国国教会の聖職者であるがホイッグ党に友人が多かったため、当初ホイッグ系と見られていた。その二人がロバート・

ハーリーという政治家のもとで一時期執筆活動をした。ハーリーはもともとホイッグだった  
が首相（1710年～1714年）時代はトーリー党を率いて組閣していた。そこで二人はそれぞ  
れホイッグからトーリーへ変節したと非難される。

当時スペイン継承戦争が延々と続いていて、その終結をめぐる二大政党ではげしく論争  
があり、ハーリーはその早期停戦を目指してフランスと秘密交渉をし、その結果が公表され  
た。この論戦でデフォー、スウィフトはハーリーの意向にそってそれぞれ論文を書いた。そ  
れが『金のかかるこの戦争を早急にやめるべき諸理由』と『同盟諸国の行状』である。彼ら  
はほぼ同時期に同じ趣旨のものを書いたが、二人が相談しあったということはない。その結  
果、この二論文は両者の特徴がよく出たものになった。デフォーは、ハーリーの御用ジャー  
ナリストであったから、その立場からホイッグ系の戦争継続支持者を説得する内容になる。  
スウィフトは辛らつな筆致で有名な作家で、自由な立場だったから当然ホイッグ側を猛烈に  
攻撃していく。結果的にスウィフトの論文のほうが多大の影響を与えて、ユトレヒト条約締  
結の方向へ一挙に進む。

二つの論文とそれを書いた作家の背景を知ること、時代と作家、思想などさまざまな面  
が見えてくる。

**キーワード**【デフォー スウィフト ハーリー スペイン継承戦争 転向】

## **Defoe, Swift, and Harley**

Kiyoto Shiotani

After the Glorious Revolution in 1688, Great Britain developed the modern parliamentary system, limiting monarchical power. The Tories and the Whigs fiercely competed for the ruling power. Both parties tried to take advantage of journalism to promote their beliefs. After the expiration of the Licensing Act (1695), many newspapers and magazines were published. Almost all writers were involved in this, known as “the paper war”. The political activities of Daniel Defoe and Jonathan Swift coincided with this movement.

Defoe and Swift did not know one another personally, but both supported the policies of Tory politician Robert Harley, then the Prime Minister, who wanted to end the War of the Spanish Succession quickly. Both Defoe and Swift, who had been regarded as Whigs, were accused of conversion.

Under the direction of Harley, each man wrote articles on the issue without knowing about the other's writings. Defoe wrote *Reasons Why This Nation Ought to Put a Speedy End to This Expensive War*, and Swift wrote *The Conduct of the Allies*. Each article is quite distinct from the other: Defoe tried to persuade the Whigs to end the war, while Swift aggressively assaulted them. Swift's article persuaded the public and parliamentary opinion, and the parties involved in the war signed the Treaties of Utrecht.

A comparison of these articles and their backgrounds reveals that both writers wrote under certain pressures but they nevertheless conveyed distinct opinions and exemplified the complexities of the political circumstances.

*keywords:* Defoe, Swift, Harley, the War of the Spanish Succession, conversion